法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

アイルランドの文学的伝統とジェイムズ・ジョイス(3)

YUKI, Hideo / 結城, 英雄

(出版者 / Publisher)
法政大学文学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要
(巻 / Volume)
72
(開始ページ / Start Page)
77
(終了ページ / End Page)
88
(発行年 / Year)
2016-03-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00012762

アイルランドの文学的伝統と ジェイムズ・ジョイス（3）

結　城　英　雄

アメリカの事情

ジェイムズ・ジョイスの死後，アメリカでのジョイス研究はまたたく間に広がった。これまで述べてきたように，1950 年代にはナボコフの文学講義でも『ユリシーズ』が取り上げられ，さらにヒュー・ケナーやリチャード・エルマンのジョイス論も書かれた。アメリカの大学では早くも現代文学への関心が高まり，『現代小説研究』（*Modern Fiction Studies*）のような雑誌も刊行されていた。したがって，ケナーやエルマンからマーゴット・ノリスにいたるまで，ジョイス研究を推進する，その流れの下地は十分に揃っていたのである。アメリカにおいてジョイスの文学が国際的な位置を占めていたことに疑いはない。そしてジョイス研究の中心地として，ジョイスの評価はさらに高まった。その流れを簡単にたどっておきたい。

ケナーやエルマンの後に登場した研究者はロバート・スコールズで，その『文学における構造主義』（1974）は好評であった。イギリスでもデイヴィッド・ロッジが『構造主義との協調』（1981）において，要点をこう述べている。「『ユリシーズ』には物語がある［……］しかしこの物語はもう一つの物語，つまりホメロスの『オデュッセイア』の物語と，共鳴しながら平行して進行している［……］それゆえジョイスの小説の構造は本質的に隠喩である。空間や時間において大きく異なり，まったく隔絶しているはずのものでありながら，両者は類似しているのである」（Lodge 11）。こうした現代の物語化の関わりについて，スコールズは「自己充足」という言葉を使用している。すでに T. S. エリオットが「神話的」手法として述べた事柄に，もっともらしい現代的な説明を下す必要があったのだ。単純化して言えば，ホメロスの充足した全景の世界が現代の世界へと転移することで，混乱した新たな物語を形成するが，その混乱がやがて自己充足の物語世界を形成することになると述べているにすぎない。こうして 1970 年代，構造主義的な読みが可能になり，ジョイスについてもその読みが流布した。スコールズの姿勢の斬新なところは，先行の批評を修正し，後続の批評を促したことだ。

たとえば，『ユリシーズ』における，スティーヴン・ディーダラスの想定するシェイクスピア，並びにそのシェイクスピアと対応するブルームの関係を取りあげたい。ウイリアム・シュートの『ジョイスとシェイクスピア』（1957）は，「『ユリシーズ』の意味の研究」という副題が冠せられているように，スティーヴンが想定するシェイクスピアとブルームの類似に着目し，スティーヴンとブルームの出会いという，作品全体の意味を解読しようとする意欲的な試みであった。このシュートの論考は「引喩」の

研究として評価され，その後の『ユリシーズ』研究に大きく貢献することになった。

しかしながら，シュートの議論は，作品を自立的な統一体と見做し，歴史的背景や伝記的事実を無視する1940〜50年代の批評，ニュークリティシズムの延長上にある。そのため，T.S.エリオットの「『ユリシーズ』，秩序，神話」（1923）と類似している。『オデュッセイア』の世界と比べて1904年のダブリンが無秩序であると説いたエリオットと同様，シュートも，エリザベス朝の華やかなロンドンと比べ，1904年のダブリンが疎外や断片化に災いされた不毛な世界であると見做している。そうした前提に拠って立てば，現代の芸術家としてのスティーヴンのシェイクスピア論に対し，疑義が持たれてもしかるべきかもしれない。スティーヴンの想定する〈シェイクスピア〉は，エリザベス朝のロンドンの〈シェイクスピア〉と異なり，腐敗した植民地都市ダブリンの反映であるだろう。

妻ペネロペイアに言い寄る求婚者を謀殺する英雄オデュッセウスと比べ，ブルームは社会から疎外された孤独な存在である。そしてスティーヴンの内面の反映であるシェイクスピア像がそのようなブルームと対応するのであれば，スティーヴン自身も無力な芸術家にすぎないことになる。まさしく『ユリシーズ』の第十五挿話では，スティーヴンとブルームが一緒に鏡を覗くと，そこには妻に裏切られた寝取られ亭主の表象である，「ひげのない」シェイクスピアの顔が映し出される。こうしてシュートは，スティーヴンのシェイクスピア論の背景に，不毛な現代世界に対するジョイスの批判を読み取ることになった。シュートの研究姿勢はスコールズのそれと酷似しているが，大きな相違は，エリザベス朝と二十世紀との間に暗黙の区別立てをしていることである。

ちなみに，スコールズの論に測して新しい歴史認識も誕生する。アメリカの批評家スティーヴン・グリーンブラッドの説くところによると，エリザベス朝の英国は，飢饉，ペスト，動乱に苦しめられており，対立，危機，断片化という言葉で概括される時代であったという。この時代の演劇活動が壮大なものであるとしたなら，それはエリザベス女王が公的な劇場を手中に収めることで，自らの権力のなさを糊塗していたからである。シュートが想像する華やかな都市ロンドンというイメージも，後世が作り上げた神話である。逆説的にも，シェイクスピアの演劇はそのような危機的な歴史を背景に，ポリフォニーの文学を生み出すことに成功したと言われている。

スティーヴンとマーテロ塔に同居しているマリガンが引用するエリザベス朝についての評言，「当時の生活がじつに情熱的なものであった」は，躍動する時代の意であるより，むしろシェイクスピア個人の同性愛を示唆しているにすぎないだろう。エリザベス朝のロンドンも二十世紀初頭のダブリンも変わりはない。ワイルドの同性愛に社会が騒然としたのは，わずか十年ほど前のことである。

シェイクスピアの時代と比べて1904年のダブリンが劣るとする，シュートの前提は修正されなければならない。そして現代が不毛であるから，スティーヴンとブルームの出会いも不毛であるとする，シュートの結論も取り消されなければならない。ここで「和解」の問題を取りあげてもいい。スティーヴンによると，シェイクスピアは妻アンとの性的トラウマを引きずり，どこまでもその傷から癒されることはなかったという。シェイクスピアがアンに残したのは，「ベスト」のベッドではなく，「セカンドベスト」のベッドであった。またシェイクスピアの墓碑銘には，「彼女の遺体をこの墓石の下に埋めてはならぬ」

（Joyce 174），といった内容の文言が刻まれていたという。夫婦の間には本当の「和解」などありえなかったことになる。シェイクスピアは偉大であるどころか，嫉妬心を最後まで克服できなかった，矮小な人物であったと言える。

ジョイスも構造主義的な思考を意識していたのか，『若い芸術家の肖像』では，ダイダロス神話という枠組みを使用した。また『ユリシーズ』では「輪廻転生」と「視差」という言葉を取り込み，古典と現代との相違を示唆していた。さらに『フィネガンズ・ウェイク』ではヴィーコの円環的歴史観を枠組みとして使用し，秩序ある物語に仕立てあげている。にもかかわらず，構造というアプローチによる読解を試みるに際して問題なのは，登場人物の主体性が希薄になることである。構造に従属するかぎり，ジョイスが主体そのものに攻撃を試みているとの結論に至らざるをえない。かくしてジョイスにはそのような認識があったのかという，もう一つの疑義が生まれる。が，それは『若い芸術家の肖像』や『ユリシーズ』のみならず，『フィネガンズ・ウェイク』にも認められる問題である。そもそも都市が主人公であるとするなら，『ダブリンの市民』にも同様な評価が下せよう。

ひるがえって，ジョイスの作品のうちで，『フィネガンズ・ウェイク』への研究が少ないと言われるが，出版直後からキャンベルとロビンソンの『「フィネガンズ・ウェイク」への骨格となる鍵』（1944）という，果敢な解説書が登場している。あるいはジェイムズ・S. エイザートンの『ウェイクの本 ── ジェイムズ・ジョイスの「フィネガンズ・ウェイク」の文学的引喩の研究』（1960）も刊行されている。その他にもアダリーン・グラシーンの『センサス』，あるいはジョイスの作品に登場する音楽など基本的なデータも揃っていた。マーゴット・ノリスの著書『「フィネガンズ・ウェイク」の脱中心化の宇宙』は，そうした先行の研究を前提としたものである。

このような着実な研究が行われていたにもかかわらず，常套的な認識枠を攻撃する時代の変貌もあった。事実，マーゴット・ノリスもこれまでの「小説的な読み」への否定から始めている。これに対してマイケル・H. ベグナルが「ジョイスは心の内では伝統主義者で，小説を構想する基本的な要素で創作していた」（Begnal 122）と反論したが，ノリスの研究はきわめて斬新であった。したがって，ノリスはこう述べている。「過去 30 年間，『ウェイク』批評を支配してきた保守的な批評家たちは，小さいが学問的な弾薬庫を持っていた。初期の草稿をめぐる文体的・テーマ的保守主義，それに作品に認められる秘儀的ではあるが伝統的な素材も，その対象として含まれていた。そのため，『フィネガンズ・ウェイク』への認識論的手引きという，包括的な研究書を目指す近年に出版された研究でも，小説として扱われ，保守的な伝統が受け入れられている。だがそれだけでは読者の前にそそり立つ，ジョイスの言葉を解読する問題のみならず，物語やプロットを判読する障害も除けないだろう」（Norris 1–2）。同じ一日を描いたとしても，『ユリシーズ』は小説であるが，『フィネガンズ・ウェイク』は夢の世界であり，そこには大きな違いがあるとノリスは宣言したのである。

ノリスは『フィネガンズ・ウェイク』を小説的に読む誤謬に鋭敏である。彼女はさらにこう語っている。この作品は「小説的前提［……］を支持していないし，実際，十八世紀以降の小説を支配したリアリズムの認識論をまさしく否定する目論見なのである。『フィネガンズ・ウェイク』の物語の手法は主

体的な個人を優位におくことにいくつかの点で挑戦している。個人的な経験の単一性やその独自性は，出来事の反復や不安定な人物たちによって，切り崩されている。小説的な語りにおける出来事の因果関係は，『フィネガンズ・ウェイク』の場合，精神分析的な自由な連想という秩序により，近接的な連想へと置換されているのである」(Norris 11)。これがノリスの要諦である。

アメリカのジョイス研究の事情はこんな感じで展開していた。実のところ，1970年代まではこんな感じであったというのが正確である。1980年代以降も，ジョイス研究のほとんどがアメリカで生まれる。しかもその生産力は他国の追随を許さぬ勢いであった。『ダブリンの市民』から『フィネガンズ・ウェイク』にいたるまで，アメリカの大学はアイルランドとは関わりなく，ジョイス研究を推進していたのだ。ジョイスがアイルランド出身の作家であることが云々されることもなかった。そのアメリカに追随していたのがフランスである。ひとまずフランスの事情をたどっておきたい。

フランスの事情

ジョイスへの関心はアメリカに限られたことではない。『ユリシーズ』はパリで刊行され，『フィネガンズ・ウェイク』の創作もパリでのことであった。ジョイスがこれらの作品に打ち込めたのも，彼を支える文学者や時代の雰囲気があったからだ。1920年代の国際的都市としてのパリはジョイスの創作と密であった。

にもかかわらず，第二次大戦中の1940年の暮れ，ジョイスはチューリヒに疎開し，その地でほどなく亡くなった。彼が残した書類は秘書役を務めたポール・L. レオンの手によりアイルランド公使の手に委ねられた。そして書類は50年間は封印されたまま保管するという条件で，アイルランドの国立図書館に送付された。レオンはユダヤ人であり，役目を果たした後，ゲシュタボの手により強制収容所に送られた。こうした身を挺した働きのおかげもあり，ジョイスのその後の研究に資するデータが残ることになった。公開されないまでも，『アイルランド国立図書館ジェイムズ・ジョイス＝ポール・L. レオン文書』として，その目録が作成されている。

ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』が多言語で構成されているとはいえ，その作品もやはり英語で書かれている。そのため，『ユリシーズ』の刊行も，シルヴィア・ビーチの書店に集う関係者，とりわけ英米文学に関心を持つ人々に影響を与えたにすぎない。その「内的独白」の手法についてはヴァレリー・ラルボーらによって試みられ，『ユリシーズ』の仏訳によりさらにその手法が引き継がれたとされる。が，『フィネガンズ・ウェイク』は一部の人々に評価されたものの，その内容を理解する人は少ない。これが実情である。それでもジョイスの影響は連綿と続いていた。あるいは名声が独り歩きしていたとも思われる。

たとえば，1968年のパリでの革命の折，ジョイスの名前が革命の精神との関わりで挙げられた。クリスチーヌ・ヴァン・ボヒーメン＝サーフはこう述べている。「ジョイスという名前は国民的作家としてよりも，革命的・国際的なモダニストの文体の主要な代表者として捉えられる。そして革命と密に連動していると思われる，前衛誌『テル・ケル』に流布しているエクリチュールの概念と同一なものであ

り，その寓意となっていた」（van Boheemen-Sarf 249）。ここでジョイスの位置が国際的・間大陸的なものであったことは自明である。

アラン・ロブ＝グリエもまたヌヴォー・ロマンについての宣言書『スナップショットと新しい小説に向けて』（1965）において，主流のフランス批評では受け入れられない実験的エクリチュールとして，カフカやフォークナーと並び，ジョイスの名前を挙げている（Robbe-Grillet 59）。ヌヴォー・ロマンとジョイスとの連結には多少の説明が必要となるであろうが，『ユリシーズ』の第 17 挿話の非人間的な描写とロブ＝グリエとの間には共通するところがなきにしもあらずであった。フランスのジョイス研究のその後の流れは，いずれギート・レモウトの『フランスのジョイス』（1990）で総括されることになるが，もう少しフランスとジョイスの距離を測定しておきたい。

そもそも，マーゴット・ノリスの『「フィネガンズ・ウェイク」の脱中心化の宇宙』が刊行されたとき，書評は厳しかった。彼女の各論を支えているのは，クロード・レヴィ＝ストロース，ジャック・デリダ，ジャック・ラカンというフランスの思想家ばかりであり，ジョイスの生前には無名の人々であった。ジョイスの文学をめぐり，これらフランス人の思想家を援用することなしに，論じることができなかったのかという疑義が提起されたのも当然である。それももっともな発言であったが，ジョイスがその後の命脈を保持するのには有効な批評であった。より正確に言うならば，アメリカの批評の繁栄はフレンチ・コネクションによるところも大きかったのである。

ロブ＝グリエに続きジャック・デリダの功績もあった。ハーヴァードのジョイス研究者のハリー・レヴィンを訪問した 1950 年，デリダはジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』にふれ，脱構築の理論の着想を得たとされる。アイルランド人作家の作品がアメリカを刺激し，アメリカからヨーロッパの思想が確立された。そうした流れがやがてアイルランドへと注ぎ，デリダを通してアイルランドもいずれジョイスの文学の意義を認識することになる。もちろんデリダという名前はロラン・バルトのテクスト論とも無縁ではない。バルトの『テクストの快楽』（1973）は，『フィネガンズ・ウェイク』を読む，最上の刺激剤であっただろう。

さらに，ジュリア・クリステヴァの影響も大きい。彼女は『詩的言語の革命』（1974）において，ジョイスと連なる作家や批評家として，マラルメ，ロートレアモン，バタイユ，アルトーを挙げている。彼らはジョイスと同じく二十世紀の思想に亀裂を入れ，あらたなイデオロギーの地平を覗かせてくれている，そうクリステヴァは言いたかったのだろう。

機関誌『ジェイムズ・ジョイス・クォータリー』の刊行

こうした状況の到来を前にして刊行されたのが『ジェイムズ・ジョイス・クォータリー』（*James Joyce Quarterly*）である。トマス・ステイリーの発案により，彼の所属するアメリカのタルサ大学を拠点にして，1963 年から発刊されることになった。アドバイザー・ボードにはクライヴ・ハート，デイヴィッド・ヘイマン，ハーバート・ハワース，エドマンド・J. L. エプスタイン，バーナード・フライシュマン，リチャード・ケイン，ジョーゼフ・プレスコットたち，当代の一流の研究者が加わった。

この雑誌は今でも継続して刊行されている。その50年以上に及ぶ刊行の歴史には，世界のジョイス研究の足跡が記されている。論文，ニューズレター，ノートなどを盛り込み，時代に即した批評にも巧みに対応している。ニュークリティシズム，構造主義，フェミニズム，デリダの脱構築批評，ラカンの精神分析批評，ニューヒストリシズム，ポストコロニアル批評などにもうまく適合してきた。ジェイムズ・ジョイスの文学にはいずれの批評にも呼応可能な広さがあったと言ってもいい。批評が万能でないことは批評論の変貌にも明らかであるが，不思議なほど，ジョイスのテクストはいずれの批評にも調和してきた。

ステイリーたちの前にも，エプスタインによって『ジェイムズ・ジョイス・レヴュー』(*James Joyce Review*)(1957–59)が，またマーヴィン・マグラナーによって『ジェイムズ・ジョイス論集』(*A James Joyce Miscellany*)(1957–62)がそれぞれ刊行されている。しかしいずれも短命であった。それに対してステイリーたちの『ジェイムズ・ジョイス・クォータリー』がいまだに存続されているのは驚きである。雑誌の刊行に留まることなく，ジェイムズ・ジョイス研究に資する交流にも力を注いでいたためであった。若手研究者を育て，基本的なデータも開示し，国際ジェイムズ・ジョイス学会の開催を促した。その後に刊行される『ジョイス研究年報』(*Joyce Studies Annual*)や『ヨーロッパ・ジョイス研究』(*European Joyce Studies*)，あるいは『ダブリン・ジェイムズ・ジョイス・ジャーナル』(*Dublin James Joyce Journal*)といった雑誌はその傍流のようなものである。

ステイリーの雑誌刊行の発想は，ニューヨークにおける，ゴサム・ブック・マートでの交流を基礎としている。ここにはジョイス愛好家が集い，「ジェイムズ・ジョイス協会」を結成し，ジョイスの読書会を楽しんでいた。このジョイスの作品を楽しむという雰囲気を失うことなく，学者もアマチュアも等しくジョイスに接する機会を読者に与えること，これがステイリーの本来の趣旨であった。アマチュアとは法律や精神分析などの職業に就いていながらも，ジョイスに関心を示している研究者たちの意である。この人たちとジョイス研究者との相違は，大学からジョイス研究によって給料を受け取っているかどうかによる。

ステイリーは自らの発刊の趣旨に則して，雑誌に幅をもたせようとした。が，『ジェイムズ・ジョイス・クォータリー』も学術誌としての道を歩くことになった。このような雑誌の方位はその後のジョイス研究にも反映することとなる。たとえば，「国際ジェイムズ・ジョイス学会」も同じ運命をたどっている。トリエステ留学中のステイリーがチューリヒのフリッツ・センを訪ね，1967年にダブリンで第一回の大会を企画した。ジョイスの孫のスティーヴン・ジョイス，さらには『ユリシーズ』を出版したシルヴィア・ビーチなども参加した。が，アメリカの学者とアイルランドの学者との対立は目覚ましかった。ジョイス研究に精神分析の言葉を口にするアメリカの学者に対して，会場から退出するアイルランドの学者がいたのだ。批評理論に拠って立つアメリカ人の発表は，ジョイスの文学とは無縁に思えたのだろう。

アイルランドでのアメリカの研究へのこの対立は，ジョイスの文学が孕む性的な事情によると同時に，アメリカのジョイスに対する英雄崇拝であったろう。アイルランドにおいてはジョイスへの関心がそれ

ほど高くはなかった。国際学会はそのことを明らかにしただけである。アイルランドの事情はその後しばらく変わることはなかった。このような状況に鑑み，翌 1968 年にステイリーはベンストックと協議し，「国際ジェイムズ・ジョイス・ファウンデイション」を設立し，以下の 4 つの目標を掲げた。①隔年で国際シンポを開催，②ジョイス研究の検索図書館の設置，③ジョイス研究を志す学生への奨学金の提供，④ニューズレターの刊行。いずれの目標もジョイスの地位を不動のものとすることであった（Kelly 212）。いずれデリダやラカンを招いてのシンポが開催されることになる。

カノンとしてのジョイス

ジョイス研究におけるアマチュアと専門家の区別は，漠とした少数の人物の呼称となっていた。たとえば，チューリヒのフリッツ・センはアマチュアを自称している。彼は『ジェイムズ・ジョイス・クォータリー』の刊行，ならびに「国際ジェイムズ・ジョイス学会」も，ステイリーとともに企画している。さらにセンはチューリヒの「ジェイムズ・ジョイス・ファウンデイション」の創立者でもある。にもかかわらず，センがアマチュアを自称しているのは，ジョイスへのアプローチ云々であるよりも，大学からの給与が受けられているか否かによるものと思われる。その業績にチューリヒやその他の大学も博士号を与えた。

そのかぎりでは「ジェイムズ・ジョイス」という名前の評価も関わりがある。その名前の意味に「天才」という評価が含み込まれたとするなら，利益を享受するのは作家その人であるだけではなく，その作家を取り巻く研究者も同様である。研究書，注釈書，テクストの校閲，さらに講演など，さまざまな問題が連結している。いわゆる「ジョイス産業」の誕生で，事業は相乗効果のように拡大していく。ロバート・マーチン・アダムズの『ジョイス以後 ──「ユリシーズ」以後の小説研究』（1977）によるならば，ウルフ，フォークナー，ベケット，ガッダ，デーブリン，ナボコフ，さらに南米のボルヘスといった作家がジョイスと関わるという。こうした事情からすると，ジョイスの作品が国際的な「カノン」として定立されていたことは当然であるだろう。

このような世界の動向にもかかわらず，アイルランドの研究者はジョイスに無関心であった。アメリカの研究者の営為が異常に思われたのかもしれない。今世紀に入ってからも『ジェイムズ・ジョイスとアイルランド人のアイデンティティの構想』（2001）という著書を手にすると，その執筆者がいずれもアメリカ人であることに気づく。このようにアメリカでのジョイス研究は目覚ましかったが，アイルランドの研究者はその流れに逆らっているようにも思えた。これはジョイスの文学にアイルランドの事情が呼応しなかったことによる。2015 年に UCD から『ジョイスについての声』という論集が刊行されたが，そこに収められた珍しい写真は 1946 年のリー・ミラーの写真である。アメリカのファッション誌『ヴォーグ』の依頼を受け，また自らの関心から，1946 年にミラーによって撮影されたものである。『ジョイスについての声』では，その写真を前景化し，ジョイスのテクストとダブリン事情を連結している。こうした近年の変貌は 1973 年の EC 加盟と政教分離という国策により，アイルランドが大陸の風土に接し，少しずつジョイス化したことによる。

実のところ，ジョイスの作品の末尾には，創作の場所とその創作に要した歳月が記されている。短篇集『ダブリンの市民』(1914) は例外であるが，そのタイトルから想像できる。『若い芸術家の肖像』(1916) においては「ダブリン 1904 年，トリエステ 1914 年」，『ユリシーズ』では「トリエステ―チューリヒ―パリ　1914 年―1921 年」，『フィネガンズ・ウェイク』では「パリ　1923 年―1939 年」とある。ジョイスによるこれらの「消印」は，自らの定点を告知していることに違いがないはずであるが，にもかかわらず，アイルランドの研究者は，その方向をつかめていなかったらしい。

もちろんジェイムズ・ジョイスという作家についての情報はあったが，その偉業を世界の舞台で発表するほど国内事情に進展が見られなかったのだろう。ジョイスにまつわる草稿や手紙など，貴重な資料がアメリカの図書館に収められ，アイルランドがジョイス研究に関わろうとする時期には，資料がほとんど不足していた。マイケル・グローデンが刊行した 63 巻本の『ジェイムズ・ジョイス・アーカイヴ』(1977–80) のような仕事は，アイルランドとは無縁のことだった。これはニューヨーク州立大学バッファロー校，コーネル大学，イェール大学，テキサス大学オースティン校，大英図書館，あるいは個人が保持するコレクション，そしてアイルランド国立図書館のデータを一同に集めたものである。

ちなみに，イギリスの学風も変わりつつあった。ケンブリッジ大学でコーリン・マッケイブが追放されたまさに 1980 年，ロンドン大学は「ジェイムズ・ジョイス・ブロードシート」を刊行した。これまでのイギリスのジョイス研究は緩慢であったが，世界の流れと断絶して英文学の研究を進めることはできなかったのだろう。ロンドン大学が開かれた大学であったことも事実であるが，ウィリアム・ピークのような研究者が読書会を開催し，ジョイス研究の道が開かれていた。それを継承したのがアンドルー・ギブソンで，彼を中心に世界のジョイス研究にイギリスが貢献するところ大であった。彼の研究を継承している学生も多い。

アイルランドのジョイス研究

このような世界のジョイス研究を横目にしながら，アイルランドは自らが所持する，ジェイムズ・ジョイスのデータを使用することもなかった。1960 年代に至る文化的な鎖国の後遺症がその後にもしばらく影響していたのだろう。しかしながら，ジョイスに対する国外での人気の高まりを受け，ダブリンのツーリスト・オフィスがジョイスの住居や物語にまつわる銘板を用意し，観光客への便宜を図った。文学が与える経済的影響に敏感に反応したものと思われる。こうして 1982 年のジョイス生誕百年祭において，ついにジョイスがアイルランド人作家であることが宣言された。

にもかかわらず，学問的なジョイス奪還闘争がアイルランドで始まったわけではない。ジョイスの死後 40 年が経過しながらも，そのテクストの解読はゆるやかであった。アイルランド人しかジョイスを理解できないという傲慢な姿勢を保持しつつも，その何たるかについては黙秘したままであった。『ユリシーズ』の末尾に記された，トリエステ，チューリヒ，パリという創作の場所，さらに 1914 年から 1921 年という創作の歳月についても，アイルランド側の研究にはその事情が見えていなかっただけではない。その他にも数々の難題を抱えていた。

たとえば，1914 年から 1921 年という歳月においては，第一次大戦とダブリンでの復活蜂起という，二つの歴史的事件が勃発している。この事件は作品の舞台である 1904 年のダブリンの人々に入り込む余地のない事柄である。それでも「悪夢としての歴史」という認識が作品の底に流れている。史実と物語の相違も認めなければならない。アイルランド人は数多くの蜂起を繰り返し，『ユリシーズ』が刊行されたころには，第一次大戦も復活祭蜂起も経験し，南北分離への問題をめぐる泥沼の戦いが進行していた。ジョイスがそのような戦況を念頭に入れていたとするなら，その意味を読み解く必要があっただろう。

同じことはユダヤ人のイメージについても言える。主人公のレオポルド・ブルームはユダヤ人の血を受け継ぎ，知人の市民たちからは他者として遇されている。1904 年 6 月 16 日のダブリンにユダヤ人がいたことは事実であるし，西部のリムリックでは説教壇で反ユダヤ主義が説かれていた。そのような事情に鑑み，スティーヴンやイギリス人のヘインズのみならず，スティーヴンが教えている私立学校の校長ディージーも，反ユダヤ主義を口にしている。にもかかわらず，リムリックの状況も，またその意見に同調したダブリン市内での反ユダヤ主義さえ，何ら話題にされることがない。当時，フランスでドレフュス事件が喧しく報道されていたことからも奇妙な空白である。このことはジョイスの意識からアイルランドの反ユダヤ主義が消えていたとしか思えない。国際的な海港都市トリエステで遭遇したユダヤ人を想い，その面影をブルームに投影したためだろう。

あるいは，イギリス系アイルランド人と土着のカトリックの対立という図式もある。ダブリンがイギリスの植民地都市であることからすれば，植民者のイギリス人に対し，さらにはその傘下で暮らすイギリス系アイルランド人への嫌悪が散見するとしても，ごく自然なことである。だがそうした対立がテクストを構成しているとは言えない。イェイツやシングが神話に依拠したということでは，ジョイスも変わるところはない（Kiberd 221）。

イギリス系アイルランド人との敵対の具体的な例はすでに問題とした，スティーヴンのシェイクスピア論について指摘されることが多い。国立図書館はイギリス系アイルランド人たちの図書館員で構成され，スティーヴンの議論の聞き手たちもイギリス系アイルランド人である。が，スティーヴンの要諦はあくまで自らの文学観を構築することにある。スティーヴンが敵対しているジョン・エグリントンが，作者ジョイスとは親しい間柄にあったことを想起しておきたい。

このように『ユリシーズ』の前半部を読むだけでも，史実としてのダブリンと遊離している部分が少なくない。さらに言えば，総督の騎馬行列は架空の事柄であるし，登場人物にもジョイスが異国で交流した関係者が取り込まれている。ジョイスはダブリンを作品の舞台とし，ダブリンの地誌や歴史を前提条件に，そこに独自の物語を貸し与えた。そのかぎりでは史実と虚構が混在していると言うべきだろう。ここでは論じるゆとりがないが，後半の文体を支えているのは，大陸で流布していた思想や芸術の手法である。ダブリンという都市を映し出しながらも，独自の視点で描かれている。さらに，フランコ・モレッティの『ドラキュラ・ホームズ・ジョイス』（1988），チェリル・ハーの『ジョイスの文化解剖』（1989），あるいはブランドン・カーシュナーの『ジョイス，バフチン，大衆文化』（1986）といった間

テクスト性の研究もある。人々の意識には様々な文化が刻印されている。

その一方，ジョイスがダブリンを舞台としていることに変わりなく，その地誌や歴史についての知識は不可欠である。その緻密な描写からすると，読者は登場人物に寄り添い，その視点を共有する必要に迫られるだろう。それに加え，視覚や聴覚を動員して感知する情報は単なる観光案内であるわけでなく，文化的な表象として現前してもいる。したがって，アイルランドがジョイス研究に貢献可能なのは，その地誌や歴史についての提供である。ユダヤ人問題，軍隊と性病，音楽，教育，娯楽，新聞，宗教，酒場，鉄道など微細なデータが必要である。これらはいずれもテクストの解読に欠かせない。女性のカトリック教徒にとっての告解の問題など，その範囲を規定した司祭向けの書籍の検討も必要である。酒場についても，定期的に警察が巡回していることから，政治的な意味が読み取れることだろう。

もちろんジョイスの作品の舞台となっているダブリンも百年が経過し，背景となるデータも失われつつある。かなりの数の古書もアメリカにわたり，ジョイスの伝記についても新たなデータは出しにくい。そのような状況においても新たな発掘があるし，ダブリンという都市そのものがジョイスの作品の案内役になっている。同時にジョイスの作品の世界が中流階級のカトリックに限定されていることも想起しておきたい。その階級の暮らしを称して「麻痺的」と呼ぶとき，ジョイスの意図が問われる。下層階級や上層階級の人々が空白化されているからである。

さらにヴィクトリア朝という時代背景もある。アイルランドがイギリスに支配されているというとき，それは顕在的な事項にとどまらない。無意識裡にイギリス文化を吸収することが必要とされていた。それは文学についてもあてはまる。『ユリシーズ』でスティーヴンが，夢にうなされ発砲した同居人のヘインズをめぐり，「夜のほかは問題がない」と譲歩するとき，彼がブラム・ストーカーの『ドラキュラ』（1897）を念頭に入れていることに違いない。同時にその物語がイギリスの植民地化の謂いであることもいずれ明らかになる。ボーア戦争が終結して間もない1904年のこと，ジョーゼフ・コンラッドの『闇の奥』（1899）の背景がベルギー領のコンゴであるとしても，その植民地事情はアイルランドとも連結している。こうしたイギリス支配の状況も無視できない。

またモダニズムという時代も考慮に入れるべきである。十九世紀から二十世紀にかけて，ダーウィン，マルクス，フロイト，ニーチェ，フレイザー，ソシュール，アインシュタインなどが登場し，生物学，歴史，精神分析学，哲学，民俗学，言語学，物理学といった分野でこれまでの思想を覆していた。絵画や音楽や映画などの領域においても，ピカソ，バルトーク，エイゼンシュタインらが輩出し，新たな芸術論も展開していた。都市生活をのぞいても，時間や空間についての新しい見方が広まっていた。さらに性についても革命的な思想が生まれていた。まさしく「モダン」な時代であった。

このような時代背景を緻密にたどることはかなり難しい。そもそもジョイスは一般の読者を対象とするより，国際的な作家としての相貌を保持することに力を入れていたはずだ。ジョイスの意図がどこにあれ，「国際的な作家」というレッテルを自らに課すことによって，先鋭な文学を切り拓く運命を担っていた。パウンドやハリエット・ショー・ウィーヴァーといった人々との交流がそのことを強要していたのだろう。トリエステも，チューリヒも，そしてパリも国際的な都市であった。地方都市ダブリンを

舞台にしたことで，モダニストとしてのジョイスの位置が変わるわけではない。

こうしたジョイスの評価を前にして，アイルランドのとるべき位置は複雑である。デクラン・カイバードの言葉に倣うなら，アイルランドには「われら」という位置があるという（Kiberd 211）。ジョイス研究はアメリカやフランスの先鋭な議論に汚染され，かつてアマチュアの特権であった楽しみを喪失しているという。それを回復するにはまずはダブリンのツーリズムに倣い，現実に虚構の空間を投影してみるべきかもしれない。ともあれ生誕百年祭を契機に，ジョイスもアイルランド人作家の一人となった。このことの意味にアイルランドは答えなければならない。ジョイス受容の「変遷期」はアイルランドの文学研究の分水嶺であるだろう。

科研研究課題番号：26370355

引用・参考文献

Adams, Robert Martin. *After Joyce: Studies in Fiction after Ulysses.* Oxford: Oxford UP, 1977.

Atherton, James S. *The Books at the Wake: A Study of Literary Allusions in James Joyce's Finnegans Wake.* New York: Viking P, 1960.

Attridge, Derek and Daniel Ferrer, ed. *Post-Structuralist Joyce: Essays from the French.* Cambridge: Cambridge UP, 1984.

Barthe, Roland. *The Pleasure of the Text*, trans. Annette Lavers. London: Jonathan Cape, 1967.

Begnal, Michael H. "*Finnegans Wake* and the Nature of Narrative." In *Critical Essays on James Joyce's Finnegans Wake.* Ed. MaCarthy, pp. 119–128.

Campbell, Joseph, and Henry Morton Robinson. *A Skelton Key to "Finnegans Wake."* London: Faber, 1944.

Derrida, Jacques. "Two Words for Joyce." In *Post-Structuralist Joyce.* Ed. Attridge and Ferrer, pp. 145–59.

Don, Gifford and Robert J. Steidman. *Ulysses Annotated: Notes for James Joyce's Ulysses.* California: U of California P, 1988.

Fogarty, Anne & Fran O'Rourke, ed. *Voices on Joyce.* Dublin: UCD P, 2015.

Gillespie, Michael Patrick, ed. *James Joyce and the Fabrication of an Irish Identity.* European Joyce Studies 11. Amsterdam: Rodopi, 2001.

Glasheen, Adaline. *A Third Census of Finnegans Wake: An Index of the Characters and Their Roles.* Berkeley: U of California P, 1977.

Greenblatt, Stephen. *Renaissance Self-fashioning: from More to Shakespeare.* Chicago; U of Chicago P, 1984.

Joyce, James. *Ulysses.* Ed. Hans Walter Gabler et. al. New York: Garland, 1986.

Kelly, Joseph. *Our Joyce: From Outcast to Icon.* Austin: U of Texas P, 1998.

Kiberd, Declan. *Ulysses and Us: the Art of Everyday Living.* London: Faber, 2010.

Lodge, David. *Working with Structuralism.* London: Routledge and Kegan Paul, 1981.

MaCarthy, Patrick A., ed. *Cricical Essays on James Joyce's Finnegans Wake*. New York: Macmillan, 1992.

McKenna, Bernard. *James Joyce's Ulysses: A Reference Guide.* Connecticut: Greenwood P, 2002.

Kristeva, Julia. *Revolution in Poetic Language*, trans. Margaret Waller. New York: Columbia UP, 1984.

Norris, Margot. *The Decentered Universe of Finnegans Wake.* Baltimore: Johns Hopkins UP, 1974.

Peake, Charles. *James Joyce: The Citizen and the Artist.* Stanford: Stanford UP, 1977.

Robb-Grillet, Alan. *Snapshot and Towards a New Novel.* London: Calder and Boyars, 1965.

Scholes, Robert. *Structuralism in Literature: An Introduction.* New Haven and London: Yale UP, 1974.

_____ *In Search of James Joyce.* Urbana and Chicago: Illinois UP, 1992.
Schutte, William. *Joyce and Shakespeare: A Study in the Meaning of Ulysses.* New Haven: Yale UP, 1967.
Segall, Jeffrey. *Joyce in America: Cultural Politics and the Trials of Ulysses.* California: U of California P, 1993.